アリ
Aブロック作品と講評
www.columnland.net

夜明け前

くらい暖かい部屋の中
僕は昨日を思い出す

僕らが見つけた角砂糖
僕らが全部運んだ角砂糖
僕らは僕らでひとつであり
すべては僕らの仕事

いま、目覚めているのは僕だけ
この時だけは
僕は僕ひとり
仲間は僕でなく
僕は僕ひとり
角砂糖を見つけたのは僕じゃないし
僕が運んだのはその小さなひとかけらだけ

今日は陽の帰るほうへ行ってみようか
そちらで僕だけ発見ができるだろうか

ああ、朝が来た

僕はまた、僕らになる

おぞましい子供

小さい頃、私はよく蟻を殺した。
人生の中で私が一番多く殺した種族は蟻だろう。
蚊も沢山殺した気がするが、ある程度の歳になってからは蚊もむやみには殺さなくなっていたので、結局蟻を一番多く殺したように思われる。
蚊を殺さなくなった理由は簡単で、自分の痒みを予防するために命を奪う事に疑問を感じたからだ。
その思考の意味する所は、命を大切に思う心が私に備わっていたという事である。
逆に言うと蟻を殺していたあの時の私はその心を持っていなかったのである。
でなければあんなにも無意味に生き物を殺す事は無かっただろう。
ペットボトル一杯に水を汲み、捕まえた蟻をそこに入れる。
初めのうちは団子のような形に捕まりあって浮いているが、段々と沈んでゆく。
そんな様子をただ淡々と眺めていた。
何故その様な事をしていたか覚えてはいない。毎日やっていたのだから、きっと楽しかったのだろう。
全く子供とはおぞましい生き物だと、今の心は感じざるを得ない。
今こんな事を考えるのは本当に不謹慎かもしれない。
私は、海に浮かんでいる。
多くの人間と共に木片を共有して、浮いている。
それが蟻に見えてきたのだろうか？
全く、大人になってもおぞましいな、私は。

船が木端微塵になったのだ。もちろん救命ボートもバラバラだ。
何が起こったら船が木端微塵になるのだろう？
そして何故これだけの数の乗客が無事で海に浮いているのだろう？
解らない。正直どうでも良い。ただ、この絶望が早く終わればよいと思う。
陰気な顔で茶色い板にしがみつくのも、段々と減る人間を意識するのも苦痛である。
手を離せば良いのだが、中々その気にはなれない。
ひょっとしたら、これはたちの悪い夢なのかもしれない、そう思う私の手に、木片のささくれが意地悪く現実を突きつける。

私の前には親子が居る。母親と娘、母親は眠る娘の腕をしっかりと握っている。
娘は死んでいる様にも生きている様にも見えた。
父親はどうしたのだろうか、ふと気になった。
私以上にこの母親が気にしているだろう。
そんな中でもその手は娘の腕をしっかりと握っていた。

娘の手が小さく動くのを確認した。
誰も助かっていないのに、とても嬉しかった。
伝えようとすると彼女は私をじっと見つめた、どうしてかその意味が大体理解できた。とても悲しい。

母親が沈む、その手を引きはがし娘の腕を掴む。
しっかりと掴んでいたはずの手はいとも簡単に取れた。

段々と意識が遠のいてくる。
真っ暗で何も見えない、今自分は何をしているのだろう？
ただ右手に掴んでいる物を離してはいけない、それだけが頭に残っていた。
やっと開いた目に映ったのは離れてゆく海面と、生きているか死んでいるか解らない娘だった。

そういうことか。

きっと神は心を持たない子供なのだ。
そして蟻をペットボトルに入れている。
それが心を持った時、神の心は蟻の事をどういう風に思い出すのだろうか？
私には少しだけ解る気がする。

アリとキリギリス

僕はアリ
冬に備えてせっせと働く、アリ
隣にいるこいつ、こいつもアリ
僕たちは小さいころからの親友で
ともに競い合い、高めあっていた

そんな僕たちのところに
ある日、キリギリスがやってきた

キリギリスはいつも遊んでいて
冬に備えるということをしなかった
そのため季節が変わり冬になると
餌がなくてとても苦しんでいた

そんなキリギリスを見て、真面目な僕は自業自得だと思った
遊んでいたからだと、内心嘲笑った
でも優しい親友は違った
一生懸命働いて作った蓄えをキリギリスに分け与えていた

僕にははじめそれが理解できなかったが
「友達が死ぬのは、哀しいだろう」
というのを聞いて、わかった気がした

僕にとっての親友はこいつだけだったが
こいつにとっての親友は、僕とキリギリスの二人になっていたのだ
僕も、もしこいつに死なれたら、とても哀しい
きっと、それと同じ気持ちなのだろう

またこいつに勉強させられた
誰にでも大切に思う人がいて、大切に思ってくれる人がいる

これは、そんなアリとキリギリスのお話

探し物の在りか

在ったものがなくなったりするのは困る。
泣くほど困る時さえある。
大抵は諦めきれずにその在りかを探す。
あっちこっちひっくり返したりしながら。
それでも見つからないときはその在りかを考える。
その在りかを想像するのだ。
どこに置いたんだろう？
どこに落としたんだろう？
どこに行ったんだろう？
どんなに探しても見つからないときもある。
あるいは失ったことを知ってなお探すことさえ。
そう、たとえば。
大切な人を失ったときとか。
そんな時、人は何を手がかりにするのだろう。
教典か？　形見か？　思い出の場所か？　それとも…？
それは人それぞれだけれど。
私は物を探す時、それにまつわる物事を思い出す。
そしてそれを手がかりに在りかを想像するのだ。
だからたぶん。
その人との思い出を私は手がかりにするのだろう。
それが想うということで。
見つからなくても、近づける気はするのだ。

春先の心地よい気候を提供していた母なる地球も今では別人のようにじめじめとした不愉快な空気をこの日本列島に垂れ流している。ストレスが非常に蓄積しやすいのは何も日々せっせと働いているエクスに限ったことではなかった。しかし、だからといって仕事を怠けるわけにはいかない。女王「フラウ」に手柄を貢がない日があれば即刻、組織から追い出されることとなるだろう。代わりはいくらでもいるのだ。エクスは数多くいる構成員の一員でしかなかった。

不快指数が異常な数値を示すほどの湿度の中、本日の仕事場は室内である。そもそもエクスたちのアジトはその建物のすぐ真下にあり、もっぱらエクスたちはその最寄の室内で手柄を探していた。基本的に手柄はまとまった量で存在しているので一匹が発見すれば、各個体の規制ノルマは達成されるのだが、どうやら本日はその限りではなさそうである。

「おいおい。今日は争奪戦かよ・・。」

エクスはぼやいた。

「そうさ。速いもん勝ちだぜ！」

お調子者で横暴な同僚、ベウテは言うと同時に駆け出していった。

「困ったものだね彼も。そう思わない？」

同じく同僚で親友のフレウントがエクスに尋ねた。

「まぁ、こっちはこっちでノルマ達成し・・・。」

エクスがそういった瞬間であった。

ひぎゅっ

聞きなれない嫌な音が聞こえてきた。体が押しつぶされて臓器がはみ出たときのような音声のように思えた。

「何の音だ？ベウテの走っていった方向から・・・・！」

フレウントがあたりを捜索しながら考察している最中であった。突如として空間が暗くなった。そして次の瞬間には前方に巨大な威圧感、存在感を持った何かがそびえ立っていた。

「うわぁあああぁ！」

エクスは想像を絶する目の前の怪物に恐怖をあらわにした叫び声をあげることしかできなかった。そういえばだいぶ前の全体会議で、我々が食している手柄の多くは自分たちより大きな怪物が口にしているものの食べかすであると聞いたことがあったが、死を目前にしたエクスが思い出す余裕はなかった。

「エーックス！速くこっちに来ぉい！」

エクスより怪物から離れた所にいたフレウントが叫ぶ。しかしあまりにも圧倒的な恐怖に飲み込まれたエクスは放心状態で立ち尽くすのみで、その場に根をはっているかのようにピクリとも動かない。

「＊＆@＃★＞￥；＋＝％！」

怪物が音声を発すると同時に天から鉄槌が下される。エクスたちに怪物の言葉がわかる由もなかったがこの空気の振動が死を伝えていることだけは理解できた。迫り来る多大な圧力にエクスの体が耐え切れるはずもなく、醜い屍を残しエクスはあの世へと強制送還された。

「エッ・・エークｓ・・がぁ！」

親友を失った悲しみを感じる暇すら当てえられぬ間に次なる鉄槌がフレウントを襲った。

「みのるちゃんたら、あれだけ自分の部屋でお菓子を食べるなって言ったのに。やだわぁ、どっからわいてくるのかしらねぇ。」

たまにはバットエンドもアリじゃない？

A-6

アリと人間と結婚

勤め先で出会い、かれこれ5年の付き合いを続けた彼女とついに結婚することになった。結婚しようという話は一年以上前からあり、彼女や僕の両親にもすでに話していたが、なにせ式を挙げるだけの資金が調わなかったため先延ばしになっていたのだ。

ついに資金がそろい、式の日程も決まったところで、彼女の父から僕に電話で呼び出しがあった。土曜日の夜、義父に指定された駅で待っていると、普段着の彼が僕のもとにやってきた。

「これから一杯、どうかね」

「はい、ご一緒させていただきます」

たったそれだけの短い言葉を交わした後、僕たちはごぢんまりとした飲み屋に辿り着いた。

「それじゃぁ、乾杯」

「乾杯」

僕もあわてて彼に合わせる。正直彼とは今まで二人きりになったことがないので僕はすごく緊張していた。彼は最初のコップを空にすると、突然僕にこんな話題を吹っかけた。

「君は、オスアリの生活をしっているかい」

「と言いますと、どういうことでしょうか」

「何時もかわいい姉妹たちに世話をしてもらって、処女女王アリとの結婚飛行、つまり交尾だけが仕事さ。幸せだとは思わないかね」

「そうでしょうか」

「君は若いから分からないかもしれないね。年を取ると、そういう一見汚い世界が羨ましく見えるものさ」

そう言って彼は次の一杯を飲み始めた。僕は思ったままの言葉を彼に返した。

「僕はそうは思いません」

「何でかね」

「お義父さん、オスアリは結婚の後に死んでしまうじゃないですか。僕はそんなのは嫌です」

「長生きしたいということかい?」

「ええ。いえ、それ以上に僕は相手と、相手と自分の子供たちと生きていたい。彼らと生活を共にしたいのです」

綺麗ごとに聞こえるが、これが僕の本心だった。義父は黙っていたが、僕は構わず続けた。

「お義父さんだって、オスアリだったら、今の娘さんも奥さんも見ていないことになるんですよ。お義父さんは娘さんと生きてきたことが幸せではないのですか」

あまりに本気で話していたため、僕の語調は荒くなってしまっていた。義父が何も答えないので、僕は急に心細くなって、黙って次の酒を飲んだ。

僕たちは無言でしばらく飲み続けた。その間しょっちゅう僕の心は後悔で痛んだ。やがて彼が席を立って勘定をし、店を出る時にそっと呟いた。

「君ならありだな」

A-7

私は誰でしょう？

私は大人になると羽で空を飛びます。

蟻 私は子供の時は穴の中にいます。

ざ

私は一センチ位の大きさです。

私は罠を仕掛ける名人です。

ざ

蟻

私は儚い彼とは違います。

ざ

砂 砂 砂 砂 砂 砂 **蟻**

私は砂が大好きです。

私は肉食系です。

私

私は虫です。

私は前に進めません。

ざ

私の特技はすなかけです。

私はよくポイ捨てをします。

私は強烈な毒を持っています。

私は強靭なあごをもっています。

私は主に黒くて小さい虫を食べます。

ざ

私は大人になるとほとんど食べません。

私を英語にすると、タンポポに似ています。

夢見がち症候群

「私を晩餐に招待するだなんて、どういう風の吹き回しだい？」
「失敬な。吾輩はいつも通りであるよ、我が助手晶クン。」
こいつの名前は大西博、私の旧友である自称天才発明家だ。いや、出来上がるもの自体は明らかにオーバーテクノロジーで、天才といえば天才なんだが……
前回の発明は通過させた生命体のコピーを作るどっぺる☆ゲン・カンだったか。通過させた生命体はドッペルゲンガーと遭遇した余韻で死亡してしまうのが欠点。毎度毎度、凄いんだが使えないものを作る男だった。
「ところで晶クン、味の方はいかがかね？」
「ん、相変わらず美味しいよ。無駄に器用なキミらしいね。」
「そうかそうか、なるほどなるほど。味の方には影響が出ないということなのであるな。」
「ちょっとまて、今何か聞き逃せない台詞を聞いたような……」
ふと、視界が揺らぐ。
「まさか、一服盛ったの？」
「失敬な。吾輩はいつも通り実験をしているだけであるよ。わが助手晶クン。」
晩餐に呼ばれて心なしか喜んでいた少し前の自分を心の中で殴りつける。そうだ。こいつが実験以外に興味を持つはず無いじゃないか。
体を、ゆっくりと落下するような感覚が包み込む……あ、せめてこれは聞いておかないと……
「それで、今回のはどんな発明なんだい？」
『アリスシンドローム』というアリスの世界が楽しめる飲み薬なのであるよ。」
相変わらず、どこかで聞いたような名前だな……そう思いつつ、私の意識は落ちて行った。

気が付くと、目の前に赤い眼をした白兎のようなものがいた。
「私は絶対に魔法少女の契約はしないわよ！？」
「何を寝ぼけているんだい？アリス。」
ん、白兎が喋った……ということはもしかして、ここは本当に不思議の国？
……実は私、ファンタジーの世界にあこがれてたんだよね～♪
「そういうわけで今からアリスにはこのヴォーパルブレードで龍を退治し、女の子を助け出してもらいます。」
「ファンタジーＲＰＧ！？ちょっとまって、ここってアリスの世界でしょう！？」
「ジャバウォッキーはれっきとした鏡の国のアリスの作中作だよ、アリス。」
ああ、そういえばそんな話があったような。確か鋭い鉤爪と牙をもってて、燃えるような目をした数メートルの怪物だ。そう、大体今目の前に現れた龍みたいなキモい怪物――え？目の前？
「ＧＡＹＨＡＡＡＡＡＡ！！」
ぎゃーーーーーーーっっ！
「がんばれありすー♪」
龍の背後から兎の声が聞こえる。そうか、案内人かと思ったがやっぱり黒幕か。
「大丈夫、そいつの強さは原作準拠だから、ソイツは実は一回刺されただけで死ぬぞオオ！」
「ＧＡＹＡＨＡＨＡＡＡ！！」
ええいっ、お前ら五月蠅い！
「まそっぷ！」
いつの間にか手に持っていたヴォーパルブレードとやらで串刺しにする。刺すんじゃなくて切る剣だった気がするが、そんなことはなかったようだ。えーっと、女の子を探せばいいんだっけ？

とんとんとん。

肩を叩かれたのに気付いて振り返ると、背後にはいつの間にか美少女が立っていた。
「我思う、故に我あり。」
「ヒロインが電波入ってる！？」
っていうか、いったいこの話はどこに落とす気なんだよ！？
「ゴフッ……もう落ちならついてるよ、アリス。」
串兎がなにやらのたまう。
「ゴボッ……その少女の名前はテレス……ここにいるのはアリスと……」

「くだらねーーーーーっっ！！」
そう叫び、私は目を開いた。つまーか落ちてねーよ哲学者は哲学者だけど人が全然ちげーよせめて間違えるにしてもデカルトじゃなくてイデア論のプラトンにしとけ！
落ちといえば、アリスの話だった時点で自明だが、案の定夢落ちだった。ところで、ここは……
「楽しい夢は見れたかね。」
顔のすぐ近く――真上から、声が聞こえた。現状把握、後頭部に柔らかい感触、そして顔を覗き込まれている。えっと、つまり。
「ああ、これはだね。つまるところアリスの追体験であるからにして、ひざまくらをしないと永久に目覚めないのであるよ。」
「説明の一部に不穏な形容詞がある気がするんだけど……」
まぁ、こいつが言うのならそうなのだろう。実験以外にロマンもへったくれもないヤツだってことは私が一番知っているし。
「気分の方は大丈夫かね？」
「んー、もうちょいこのままにしといてくれると、助かる。」
気分の方は、すこぶるいいさ。
再び体験したいとは思わないが、今回の発明は私にとって、多少は有用だった。

A－9

アリとキリギリスの対話

ある暑い夏の日のことである・・・

蟻　（はぁ、さっきの荷物はやけに重かったぜ・・・。
畜生！あいつ、また仕事さぼって遊んでいるぞ！
今日という今日こそガツンと言ってやる！）
おい、いい加減、越冬の準備をしたらどうだ？
『アリとキリギリス』の話は知っているだろう？
このままだと冬を越せないぞ！

キリギリス　ああ、だが俺たちは生き方を変えない。
夏を楽しむと決めたのさ。

蟻　どうして？　後悔するのは自分だぞ？

キリギリス　俺たちの寿命は
２カ月だからさ。

ありのままの自分でいよう

ありえないほどの困難にあっても

ありったけの力をふりしぼって

ありふれた毎日の中にも

ありゃ？って思える楽しさを見つけて

生きていく

こんな人生もありだよね

「ありのひとりごと」

A-11

ローレライの歌声

そう、これは、私の復讐。

「えぇっ、有明さん歌えなくなっちゃったの？コーラス部のホープだったのに、残念だね。」
皆は口を揃えて同じことを言う。この前の事故のショックとやらで、私は歌どころか声さえも出すことが出来なくなってしまったらしい。
昔から歌うのは好きだった。喜びも、怒りも、悲しみも、楽しさも、私の見えない心を表現できる感情の発露。それが私にとっての歌であり、全てだった。
だからなのだろうか。今は此処にいても、何も感じない。

放課後にコーラス部が練習しているのを横目に見ながら、あてもなく校内を彷徨う。気が付くと、自然と人気のない中庭に辿り着いてしまった。
日は傾き、緑の庭園は赤い透明水彩に染められている。地面に目を遣ると、蟻の行列が一つ。あくせくと働く様が滑稽で、その内の一匹を潰すと、楽しくもないのに笑えてきた。

「随分酷いことをするねぇ有明さん。」
ああ癪に障るこの長閑なしゃべり口。何故だか毎日毎日中庭に来る私の、クラスメイト。
「……だって、たとえ一匹いなくとも、この行列は続いていくじゃない。」
「じゃあ潰されちゃった彼はどうなるのさ。」
またこいつは。あの時みたいに空気の読めないことを言って。人々は私の歌声が失われたことを悔やんでいたのに、一人命の無事を喜ぶとか、もう本当にあり得ない。
あんたのせいで、部活のみんなに妬まれて裏切られて声を潰されそうになったのに、わずかに人を信じちゃうじゃない。

そう、これは、私のあんたに対する復讐。
別に他の連中には、私は声が出ないと思わせておけばいい。あいつらに聞かせてやる歌なんて無いし、私は歌うだけの人形じゃない。
でも、あんただけは違う。芸術に無関心で、それでいて人のありのままを受け止めてくれるあんたを、私の歌で、私の全てで、息もつけなくさせてやる。

赤く彩られる二人きりの空間で、私のアリアが響き渡る。音楽に疎いくせに、綺麗だねぇと心地よさそうに耳を傾けるあんたが、この上なく腹立たしかった。

目指すのはローレライ。美しい歌声で数多の船を沈めさせてきた、妖艶な歌姫。
だから私は、死んでも「ありがとう」とは言ってやらない。

A-12

「アリの小さな叫び」

踏まないでください

コンテスト結果

[Aの部]

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
A01	夜明け前	0 pt	11 位	0 sp
		小さな蟻に、つかのま宿った小さな自我。 角砂糖のくっきりした輪郭とともに、個として生きていくこと、社会の一員として生きていくことの意味をしずかに問いかける、含蓄深い今週の表紙でした。 ポイントは入らなかったけれど、朝日とともに輝くようないいフレーズがイチオシフレーズに２つも選ばれてて、さすがな読み手さん達です。 イチオシフレーズ：「僕はまた、僕らになる」×２		
A02	おぞましい子供	22 pt	1 位	1 sp
		極限状況を提示して、神の心は？ 蟻の溺死、娘の入水、具体的な光景が鮮明に刺さります。 作者さんが深くつよく考え抜いた果てに生み出された鮮烈なイメージであり、含蓄ゆたかなメッセージであることが、読み手にまっすぐ伝わってきます。 長文ながらしっかり読み込んでもらえて、ついについに壇上ゴールド・メダルに輝きました。おめでとう!!! 特別賞：命をたいせつにしま賞（蟻を踏まないでください ２ ５ １１同時受賞）		
A03	アリとキリギリス	2 pt	7 位	0 sp
		友達が死ぬのは悲しいだろう、なるほどね。童話の残酷な展開をつくりなおして、友情のあたたかみへ。ほのぼのテイストです。 でも、自分のぶんの食糧なんだけど、といじわるツッコミしたいかたはA-９へどうぞ。		
A04	探し物の在りか	1 pt	9 位	0 sp
		探し物という身近なたとえから入って、中段から「失ってもなお探す」という展開に持ち込んだ着想が秀逸です。 そうだよね、亡き人を思うって、思い出を再構成することだよね、と共感しつつ読み終われます。 「そう、たとえば。」からの転調の巧みさ。詩人を目ざされるみなさまは参考にされてください。		
A05	たまにはバットエンドもアリじゃない？	2 pt	7 位	1 sp
		それを言うなら「バッドエンド」！ は措いといて。 ひぎゅっ。が印象的でした。 エクス、助かるかなと思ったのにー。 フラウにフレウントにエクス。名前と付けて小世界を構築している作者さん楽しそう。裏付けとなっているのは、たしかな描写力でした。 特別賞：長文なのに読みやすかったで賞 命をたいせつにしま賞（蟻を踏まないでください ２ ５ １１同時受賞）		
		8 pt	5 位	0 sp

A06	アリと人間と結婚	お父さん、ラストのセリフがカッコいい！ つい熱くなってしまった僕の気持ちがしっかりおとなの風格で受けとめられて、読み手も安心の読後感です。 イチオシフレーズ：「君ならありだな」		
A07	私は誰でしょう？	16 pt	3 位	2 sp
		アリジゴクくん登場。 レイアウトと内容のシンクロぶりが会心の仕上がりですね。あまたのアリさんを食って、ブロンズ・メダルです、おめでとう！ 特別賞：私は誰で賞？（響きが良かった故） 私は誰で賞（実は狙ったで賞）		
A08	夢見がち症候群	1 pt	9 位	7 sp
		詰め込みましたね～（苦笑） スピード感上々、小ネタの切れ味もよく、博士と晶くんの距離もちょっとだけ縮まったようで、めでたしめでたし。 書きやがったなコノヤローのフロアの声が、最多特別賞となりました。おめでとう！ 特別賞：がんばったで賞（新聞の記事っぽい） 長いで賞（長いから） コード違反で賞（魔法少女の契約/まそっぷ） 夢みがちで賞（妄想がすばらしい） 長すぎる賞（長すぎる） 段位認定三段（三段） 長すぎで賞（長すぎだから） イチオシフレーズ：「GAYHAAAAAAA！！」「まそっぷ！」		
A09	アリとキリギリスの対話	16 pt	3 位	0 sp
		たしかに２ヶ月なら越冬の心配なんて、するだけムダですね。 いいおはなしへのナイスツッコミ、刹那主義、快楽主義のキリギリスさんにブロンズ・メダルを差し上げましょう。乾杯！ イチオシフレーズ：「寿命は２ヶ月だからさ」		
A10	ありのひとりごと	0 pt	11 位	2 sp
		「ありゃ」の脱力感が、いいアクセントになってます。 「ありのひとりごと」と題されていますが、「おれのひとりごと」としても読める親しみやすさでした。 特別賞：おしい賞（おしい） アリで賞（アリです！） イチオシフレーズ：「ありゃ？」		
A11	ローレライの歌声	3 pt	6 位	1 sp
		ストーリーテリングの巧みさに瞠目です。 事故、それをめぐる部活のみんなと彼との違い。文中にすっすっとさしこまれる記述で、しっかり前段の人間模様が読みとれます。 ふつうだらだらと時系列で書き始めてしまうのですが、こうすればぎゅっと凝縮できて重たくなりません。二段組みストーリーテラーのみなさま、ぜひぜひ彼女に弟子入りするべし。 それにしても、勝ち気で美しいお姫様には、こんな茫洋としたのほほん男子が似合いますね。東工大男子、ひとつの理想か？ 特別賞：戦艦で賞（ローレライと有明を踏んでい		

		る!!） 命をたいせつにしま賞（蟻を踏まないでください２５１１同時受賞）
A12	アリの小さな叫び	19 pt / 2 位 / 1 sp この小ささが、いじらしい。 みごと、みんなのツボに入りました。 長文揃いの今週の空気にも後押しされてシルバー・メダル＆今週のイチオシフレーズ大賞ゲットです。おめでとう!! 特別賞：アリがちで賞（誰かやるだろうと思ったから） イチオシフレーズ：「踏まないでください」×８

[Bの部]

コラム番号	コラムタイトル	点数 / 順位 / 特別賞 まじょコメント
B01	無題（コロニー）	2 pt / 11 位 / 3 sp わあ、コロニーだ！ と見た目で楽しくなれる表紙。 そこにさしこまれた表現が図鑑っぽいカタい記述なのもよく似合ってます。レイアウトが評価されて最多特別賞タイです。おめでとう！ 特別賞：レイアウトがんばったで賞（レイアウトがすごかった!!） レイアウト頑張ったで賞（アリの巣を表現するという発想が良かった） レイアウト賞（アリの巣最高!!） イチオシフレーズ：「フェロモン」
B02	アリ？	4 pt / 7 位 / 0 sp アリエナーイ、と心で返しつつ、とんとんとんと付き合ってゆくと、アリ？ これって自慢？ まんまとやられたのかも。おしあわせに☆
B03	アリ	10 pt / 4 位 / 1 sp 流されるアリってどんな気持ちなんだろうな？ と回顧しつつも、でも足元のアリをずりりと踏み潰してしまう。 誰にでもある経験の意味を深く問い詰めて、いったいなぜ？ と重いカタマリごと読者に投げつけてきます。ざらついた読後感。 ここちよい予定調和だけが文章の使命じゃない、と教えてくれる逸品でした。 特別賞：一人で戦ったで賞（一人で戦ってたから）
B04	アリクイ	3 pt / 9 位 / 1 sp クイクイクイクイ。 ひょうきんな言葉の響きが楽しい。 あり？ あり、だと思います！ 特別賞：食物連鎖の頂点で賞（リズム良し） イチオシフレーズ：「アリクイクイクイクイ」×３
B05	アリとキリギリスと現代社会	7 pt / 6 位 / 1 sp イソップ童話の説明まで組み込んじゃう親切さ。社説のような、きっちりと折り目正しく、論理性の高い仕上がりです。 ニート現象を指摘し、それを憂うだけのありがち社説に陥らず、アリ/親がいけないんだ、ときちんと対応策を提示した姿勢に大きな◎。 がんばれ正統派。TAさん、枠を空けて待ってます。 特別賞：正統派賞（正統派でよく書けてたから）
		12 pt / 3 位 / 0 sp 雨ニモ負ケズ、みたい。

B06	アリのように	寡黙で骨太な人物像がすっくり立ち上がってきます。 こんなふうに墓碑銘に刻まれる人物に私はなりたい（←もちろん、心の墓碑銘）。 と思った読者さんが多かったのでしょう。ブロンズ・メダルの評価をいただけました。おめでとう！		
B07	大地の上の戦い	2 pt	11 位	1 sp
		蟻のくせに、セシリアとイザヤ。けなげな乙女隊長さんたちの大奮戦。ほほえましく、くすぐったい読みごこちです。 「背中を預ける」……テンプレながら熱くなれる表現だなあ。 A-5と同じように楽しみながら書いている作者さんが浮かびます。 特別賞：がんばったで賞（すごい頑張っている感じがしたから）		
B08	アリ充爆発しろ	3 pt	9 位	3 sp
		いやもう大インパクト。 それを受けての「説明しよう」にも笑いました。 で、どんなふうに爆発すればよいのでしょう？ご近所迷惑になりませんように。 ユニークアイデア、めでたく大ヒットで、ごらんのようにイチオシフレーズ総なめ＆最多特別賞タイです、おめでとう!! それにしても、机の上にアリ？？ 特別賞：蟻が気に入ったで賞（机の上にいたアリが選んだため） アリとお友達賞（その発想はなかった） １００万人コードすれすれで賞（危ないから） イチオシフレーズ：「アリ充爆発しろ」×９ 「説明しよう」		
B09	アリとヒト、蟻と人間	8 pt	5 位	1 sp
		生物学者さんのプロポーズでしょうか。さりげなく知識をはさみつつ、ゆっくりと本題へ。 ドラマのシーンにありそうな、巧みなセリフ展開でした。 で、どうだろう？ 実るといいね。え、ダメ？ 特別賞：アリえないプロポーズ賞（これじゃ落ちないよ）		
B10	私へ/私より	4 pt	7 位	3 sp
		ありのままという安易な言葉に甘える自分に鞭を打つ。ぴしり。 とても芯のつよい応援メッセージで、最多特別賞タイです。おめでとう！ 「やりたいことをやりきらないまま終わることをおそれてください。」そう、コラムも後半戦です。 特別賞：深イイで賞（オレが好きだから） 意味が分からない賞（作者の意図が読めない） アンジェラ・アキで賞（「手紙」という曲に似ているから） イチオシフレーズ：「私（あなた）へ」		
B11	無垢な瞳	13 pt	2 位	1 sp
		子供がアリをかまう。ちょっと大小の差がありすぎてイメージしにくいけれど、漫画的に思い浮かべれば可か。 白い顔にぼろぼろの部屋。ああシロアリさんかーと伏線の張り方もていねいでした。 シロアリが駆除されて大泣きする姿も見てみたかったり。ユーモラスな特別賞も入って良きかな。シルバー・メダルです、おめでとう!!		

		特別賞：おうちがバイバイで賞（おうちがバイバイだから）		
B12	無題（ほら、さあ）	22 pt	1 位	0 sp
		なんといってもラストの「ほら、さあ」が、とてもやわらかく、でも力づよく背中を押してもらえるうれしさに満ちています。 ありふれてるけどありあまって、ありきたりだけれどありったけで……と転がってゆく「あり」コレクション。言葉遊びって、どうしても技巧が目に付くのですけれど、この作品は全くそんなことはなく自然な流れを醸し出し、こまやかな手仕事に立ち会えた好印象です。 うん、感動したので絶賛してみました。 みんなも感動したので首位まで昇りました。おめでとう、ゴールド・メダル!!		